

# ひろば 大代

5.56.2.25  
大代公民館

## 節分祭について

八幡宮司藤田権現  
節分とは冬と春とのゆき、  
かわり、季節の移り変わる立  
春の前夜を指す。  
冥は此の夜に終るを以  
て冥明けとも。翌日は陰曆  
元日なるにより平越とも云  
い厄年を迎うる者、送る者  
また一歳の厄難を払わんが  
為神社では、氏子の為、節  
分祭を行い、豆を打撒ぎ、  
当夕は一般民衆でも「鬼は  
外、福は内」なる唱言と共に  
厄払いを行う。

要するに、この行事は人間  
に不慮の災害や、不幸をも  
たらす悪鬼を追放して、福  
徳幸運を招くと云う神秘的  
年中行事である。



## 冬への暮しより

### ◆健康を保つ料理

下市 山根 菊枝

私の家では、特に自慢料  
理と云えるものは何もあり  
ませんし、好みも年と共に  
変わるものですが、寒い冬は  
兎角鍋ものが多くなり勝ち  
な為、色々変化をつけたり  
タレや合せ酢等我が家に合  
ったものを作れば、我が家  
の味となり、野菜も充分と  
れるので、横着したい時に  
よくします。

毎日のおかずも主菜は肉  
や魚に片寄り勝ちになる為  
副菜の方でそれを補う様心  
掛けますが、特に意識とな  
くても、家族への愛情、思  
いやりがあれば、自然にバ  
ランスにも気を配り、健康  
を保つ源にもつながるもの  
と信じます。

お蔭で数年来風邪もひか  
ず、病気がしい病氣もしな

かったのはこの為ではな  
かと思っております。

御近所の方と、おかずの  
やりとりで、思いがけない  
御馳走が加わり、親睦にも  
大いに役立っている今日此  
の頃です。

### ◆私の健康

植松 渡井 鶴吉

私の目標は大田市一番の  
長生きと申しますと健康  
が付きものでございます。

健康と申しますと誰方  
も気の付く事ですが、食べ  
る、動く、寝る、この三つ  
が大切です。

これを実行することは並  
たいていでは御座いません  
これを怠つたり、休んだり  
しては何の意味もございま  
せん。

この三つを守りますと、  
大切な環境もよくなって、  
日々を楽しく過ごすことが出

来ます。

私の健康はこの三つを守  
ることで御座います。

### ◆感謝の日々

飯谷 泉 スミ

私は旧八代村、飯谷に生  
まうけ、年若くして、泉家  
に嫁ぎ、多くの子供を育て  
て、現在までの苦勞は一言  
では云い現すことは出来な  
いのです。

戦前、戦後の品不足は、  
大変なものでしたが、若い  
頃から身体が非常に元気で  
主人と協力し、なんとか切  
り抜けてきました。

良い年ばかりは続かず、  
四十二年春、四ヶ月も病床  
に居りましたが、お蔭様で  
又動く事が出来、本当に有  
難いことです。

仏様への礼拝は毎日欠か  
さず、食事の不満足は云  
わず仕事に感謝して傷かせ  
て頂く事が健康に一番良い

と思ひます。

### ◆ 読書と私

柿田 藤井博

私の読書は趣味と云うより、むしろ中毒に近いもので、古希を迎える今も私の身辺には本や雑誌が散乱しており、それで又本人は落ち付くものである。

雑学を吸収するのが目的で求めたものばかりで、その日その時に応じて相手と変わる。

年齢のせいかな、最近では老人関係のものが多く取上げられる様になつて来ている。

貧、病、孤独、無為が老人問題の対象となるが、その内容は複雑で、行末に溜息を洩らすことも、しばしばある。

唯今は読書を頼りに私の余生の組立に専念している次第……

ぼたん雪  
降る夜に果る命歎し

### ◆ 右原 齊藤康子

今の子供は、本を読まないでテレビを見過ぎると思ひます。

テレビは、テレビの方から子供の中に飛込んで来るので「自分から求める」と云う事をしなくなる。又テレビは早くて、鋭い。それに比べて文章や本は徐々に人の心にしみこんで、心を深く動かします。

情報時代にこそ読書は必要ではないでしょうか。学芸が進むにつれて、中々読書が出来なくなるのでは。

本も読んで欲しいし、勉強もして欲しい。親の身勝手な願ひです。

### ◆ 椿 山根花代

思えば戦前戦後の混乱期を只農業と育児に追われ、何時の間にか半世期が過ぎ、ホツとした今では体も思う様になりません。

こんな時感謝の念をこめて今まで出来なかつたお寺に参りや、読書をしておうます。目も眩しくなう一頁でも読んで理解すると云う事は特に無知な私には思ひにまかせず、今更下ら及直させられる事が多いのに驚いております。

今後町内の皆様方の、お世話にならうと私に出来る事はさせて戴き、残り少ない人生を有意義に過ごしたいと願っています。

● 浄土を知り  
廿首を知らう ●

真宗本派  
法林山 浄土寺  
大塚大塚下市

二事由  
開基 覚照(俗梅原田源重郎)  
父は源田正少病入道、九州熊後国に於て二十七万石余りを領していました。二男である源田源重郎は羽仁美濃寺に随い

石見国津摩郡福光に未まし(一四五三年(享徳元年)本願寺八世蓮如宗主の化導により覚照と改められ、宗主の命により一字を建立、今の浄土寺です。

この浄土寺五代法覚住職は石山寺合戦(天文年中、本願寺頭如上人が織田信長と対陣したこと、一五五〇年前後のこと)に石見の僧侶等を引率防戦奮闘し、抜群の功があり、多くの賞を受けられました。

一六九四年(元禄七年)四月三日寂如宗主より本像及寺号を賜り、浄土寺と附すしとあります。

この寺院は火災もなく、系図もはっきりしています。一八三〇年(文政十三年)本堂が再建され、桁上二間、梁上二間、建坪一四四坪(約四七五二坪)の広大な建築です。(大田市誌外)

二佐 原田秀興氏(現)

原田秀興氏(現)

原田秀興氏(現)

原田秀興氏(現)